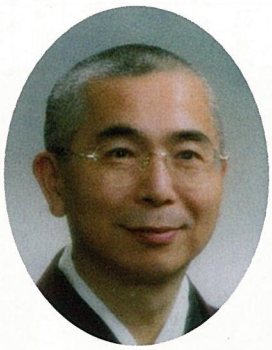
「もったいあり」

犬山・寂光院山主
松平實胤（まつだいらじついん）



「一番大切なもの」は「命」に決まっています。さてこの命ですが、「命」があるということは「今生きている」ということです。命を失うということは「死ぬ」ということです。では生きている人と死んでいる人の違いは明白です。息をしているかしてないかです。早い話が命とは「息の力」、「生きる力」といっていいでしょう。

さて、この息ですが生まれる直前は母親が代わりに息をしていてくれました。誰でも「息の力・生きる力・命」は母親とつながっています。親のない子はいませんから、ずっと何代もつながっています。そのつながりは人類の起源までしょうか。いや人類を生み出す生命の起源までしょうか。それとも生命を生み出す地球の起源までしょうか。宗教的にいえば、一番最初、一番の源は「大いなるいのち」と表現します。すべての命は「大いなるいのち」からずっとつながっています。私は「大いなるいのち」から「息の力・生きる力・命」をいただいて、今ここで息をしています。同様にこの世に存在する今息をしているものは動物も植物もすべて「大いなるいのち」につながっています。すべてが「大いなるいのち」を戴いた尊い存在です。

この「大いなるいのち」を仏教では「仏」と捉えます。ですから今生きとし生けるものは凡て仏の命を戴いた尊い存在です。日本人はその「大いなるいのち」を「勿体（もったい）」と表現してきました。最先端の生命科学では「地球上の生物はすべて、ＤＮＡを基本物質とする細胞でできており、祖先を同じくする仲間」と断じています。モノにも仏の命宿る、「もったいあり」と言って、モノを粗末にすると「もったいない」とたしなめてきたご先祖様に脱帽です。一枚の紙もかつて息をしていた植物を原材料としています。石油化学製品もかつてこの世に存在した生物が地中で長い長い時間をかけて石油化したものを原材料としています。

すべてに「もったいあり」、これが永久不変のこの世の「キーワード」です。すべての悪事、すべての不幸は勿体を粗末にすることから始まるといっても過言ではありません。